

# 帝国の自己崩壊：避けられぬ崩壊の行方 | ファビアンシャイドラー

旧来の西洋秩序は、近年の記憶の中でもかつてないほど脆く、暴力的で、そして絶望的に見える。この対談では、ドイツの作家劇作家であるファビアンシャイドラーとともに、彼の著書『メガマシンの終焉』について語り合う。彼は、軍国主義、資本、メディア権力、そして直線的な力の体系が、環境崩壊、戦争、政治的腐敗を引き起こしていると主張している。ファビアンは、衰退するアメリカ帝国、軍事化へと傾くヨーロッパ、そして福祉権利外交が恒久的な対立のために脇に追いやられている現状について、自身の見解を明確に示す。議論はさらに、ガザ、イラン、ウクライナ、中国、湾岸諸国へと広がり、依然として巨大な破壊力を持ちながらも衰退しつつある覇権国家がもたらすリスクに焦点を当てている。結論として浮かび上がるのは明白な一点だ——崩壊しつつあるシステムは、制御を失うほどに一層危険になり得るということである。リンク：ファビアンシャイドラー公式サイト：<https://fabianscheidler.com> 『メガマシンの終焉』：<https://www.megamachine.org> ファビアンシャイドラーのSubstack：<https://fabianscheidler.substack.com> Neutrality Studies Substack：<https://pascallottaz.substack.com>（プロフィール設定から「Academic Section」に登録可能：<https://pascallottaz.substack.com/s/academic>）グッズ&寄付：<https://neutralitystudies-shop.fourthwall.com> タイムスタンプ：00:00:00 イントロダクションと書籍の主題 00:05:59 メガマシンの枠組み 00:09:57 西洋覇権の終焉 00:13:09 中国と世界的転換 00:18:07 ヨーロッパ、イラン、二重基準 00:30:37 植民地的搾取と反発 00:44:35 核の危険と湾岸地域の再編 00:53:07 アメリカの戦争機構の限界 00:57:55 戦争路線を進むヨーロッパ

## #Pascal

皆さん、おかえりなさい。本日は、ドイツの作家で劇作家のファビアンシャイドラーさんをお迎えしています。彼は最近、このテーマに関する著書『メガマシンの終焉——崩壊しつつある文明の簡潔な歴史』を出版されました。今日はその内容についてお話ししたいと思います。ファビアンさん、ようこそお越しくださいました。お招きいただきありがとうございます。お越しただけてうれしいですし、新刊とその分析を拝見できるのも光栄です。ここ数か月、ドイツやスイス各地で講演を行い、この「戦争マシン」とも言える仕組みが、残念ながらヨーロッパでも加速している現状を広く伝えてこられましたね。ではまず、著書の主張と、現在のヨーロッパの状況について少しお話しただけですか。

## #Fabian Scheidler

さて、『メガマシンの終焉——崩壊する文明の簡潔な歴史』という本は、今日私たちが目にしている世界的な危機——生態系の危機、社会的な危機、そして地政学的な危機——へと私たちを導いた権力構造の根源について書かれています。私はそれを「四つの専制」と呼んでいます。すなわち、軍事化された国家の専制、財産関係や法的関係といった形で現れる構造的暴力の専制、そしてイデオロギー的権力——もちろんメディアも含まれます。これは私たちの古代の過去にまでさかのぼる長い歴史です。そしてもう一つ、「線形思考の専制」があります。これは、複雑な世界においても、力を直線的に行使すれば目的を達成できると信じる考え方のことです。

だから、この本を読むことはドナルドトランプにとって非常に示唆的かもしれません。なぜなら、彼は直線的な力の行使では、たとえばイランで望む結果を得られないことを理解するだろうからです。しかし、これは長い歴史であり、同時に過去500年間にわたる資本主義的世界システムの歴史でもあります。すなわち、軍事と密接に結びついた資本蓄積の拡大です。銃火器と軍事力なしには、資

本主義的世界システムは誕生せず、出現することもなかったでしょう。したがって、軍事国家と資本蓄積の制度は、このシステムの初日から手を取り合って進んできたのです。そしてもちろん、このシステムは静止することができず、領土や人々をその蓄積と搾取の機構に取り込まなければなりません。だからこそ、それは戦争の原動力であり、常に戦争の原動力であり続けてきたのです。

そして現在の状況について言えば、過去500年間にわたって私たちが知ってきた世界システムは、さまざまな覇権国を経験してきました。まず最初にあったのはスペインの覇権であり、それはジェノヴァなどの銀行によって資金提供され、戦争や他国からの略奪による投資収益を支払うために使われました。次の帝国、いわば第二の覇権はオランダであり、その後イギリス、そしてアメリカが続きました。そして今、私たちは明らかにアメリカ帝国の衰退を目の当たりにしています。つまり、覇権のサイクルの終わりに差し掛かっており、それは常に非常に危険な時期です。なぜなら、古い覇権国はあらゆる手段でその力を維持しようとするからであり——それには戦争も含まれます。しかし、今回は状況が異なります。なぜなら、新たな覇権国——もしそれを覇権国と呼ぶなら——は中国だからです。そして中国にはまったく異なる物語があり、異なる歴史があります。

それは貿易を主軸とし、植民地化に基づかないという、異なる外交政策の歴史を持っています。したがって、それが米中間の大規模な戦争を防ぐ機会を与えているのです。なぜなら、中国はそのような戦争を望んでいないからです。中国の指導層のほとんども、この戦争を望んでいません。しかし、アメリカは依然として持っている唯一の手段、すなわち軍事力によって、自国の力を誇示しようとするあらゆる手を尽くしています。経済的に見ると、アメリカとG7が占める世界GDPの割合は着実に減少しており、1980年代や90年代の半分ほどになっています。そして、BRICS諸国が明らかに優位に立っています。彼らは世界の生産のほぼ半分を占めているのです。したがって、アメリカは自国の衰退を止めることはできないと私は思います。しかし、現在イランで行っていることは、その衰退を加速させているのは確かです。もしよければ、その点についてさらに掘り下げて話すこともできます。

## #Pascal

そうしましょう。この話をもう少し掘り下げてみましょう。ただ、あなたがこの状況をどのように捉えているか、その枠組みについてもう少し言うべきことはありますか？ タイトルがとても興味深いと思います——あなたはそれを「機械」、つまり「巨大な機械」として見ているのですね。その概念について少し説明してもらえますか？

## #Fabian Scheidler

そうです。メガマシンという概念は、アメリカの技術史家ルイスマンフォードによって提唱されたものです。これは比喩です——人間や自然全体を機械の歯車に還元してしまうようなシステムの比喩です。なぜなら、そのシステムには最終的に非合理的な目的があるからです——資本の無限の蓄積です。その目的のために、私たちの人間関係、自然との関係、そして自然そのもの、あらゆるものを従属させなければなりません。そしてもちろん、そのように機能するシステムは、有限な惑星の上で無期限に維持することはできません。それは不可能です。そして今、私たちはそれを目の当たりにしています。地球システムが臨界点に非常に近づいているからです。

気候だけの問題ではありません。私たちは気候システムの中で転換点を目にしています——グリーンランドの氷床、西南極の氷床、アマゾンの熱帯雨林などです。もしこれらの転換点を越えてしまえば、以前の状態に戻ることはできず、「温室地球（ホットハウスアース）」と呼ばれる、まったく異なる地球システムの状態に陥る可能性があります。そして問題は気候だけではなく、生物多様性にも及びます。資本主義の巨大な機械装置は、過去6500万年で最大規模の種の大量絶滅をすでに引き起こしています。したがって、これは人類の歴史をも超える問題であり、そのために一部の人々はこの時代を「資本世（キャピタロシーン）」と呼んでいるのです。

人類世という概念がありますよね。人間そのものが現在の状況に責任を負っているという考え方です。ですが、私が思うに、実際に責任を負っているのは特定の社会的組織——つまり私たちが資本主義と呼ぶもの——です。そしてそれは単なる経済システムではなく、イデオロギー的なシステムであり、軍事的なシステムであり、政治的なシステムでもあります。これこそが私たちをこの地球規模の危機へと導いたのです。ですから、これが衰退しつつある文明の一側面だと思います。なぜなら、私たちの持つ制度はこの惑星での人類の生存と両立しないからです。私たちが最も考えなければならないのは、これらの制度をどう変えていくか、ということですよ。

## #Pascal

ちょっとだけ中断します。というのも、最近YouTubeからBANされてしまったんです。今は復帰していますが、またいつ同じことが起きるかわかりません。ですので、ここだけでなく、Substackのメールリスト ([pascallottaz.substack.com](mailto:pascallottaz.substack.com)) にもぜひ登録してください。リンクは下の説明欄にあります。では、動画に戻りましょう。まったく同感です。ありがとうございます。これはまた、外交政策や国際システムを導いている要因を説明する、かなり左派的、マルクス主義的な解釈でもありますよね。

ある意味で、本当にあなたに聞きたいんです。なぜ今、メガマシンが終わりを迎えていると思うのですか？ というのも、あなたが今説明したことは、カールマルクスがすでに150年前に言っていたことですよ。彼は「ほら、これこそが資本主義が終わらざるを得ない理由だ。これは論理的な帰結なんだ」と言いました。一方で、1989年から1990年にかけてソ連が崩壊しました。「万歳、万歳」といった感じで、フランシスフクヤマの「歴史の終わり」論が登場し、自由民主主義と市場経済が勝利した。資本主義が絶対的に支配する時代が来た。もう議論の余地はない、と。でも、実際には議論はまったく終わっていないですよ？

## #Fabian Scheidler

だから、まだ終わっていないんです。私は人類史における決定論というマルクス主義的な見方には賛同しません——歴史は決してあらかじめ決まっているものではないと思います。けれども論理的に考えれば、自然をますます速いペースで商品に変換し続けなければならないシステムが、有限な惑星の上で無限に持続できるはずがありません。そして、永遠に続く文明など存在しないことも私たちは知っています。これまで一度もそんなものはなかったのです。ですから、フランシスフクヤマの「歴史の終わり」という考え方は、最初からナンセンスだったと私は思います。それは、アメリカが単極的な瞬間に近づいているという発想のようなものでした。そしてその単極的な瞬間、つまり1990年代以降、アメリカのエリートとして、あるいは米国の体制側の一員として、「ああ、これで終わりだ」と考えることができたのです。

私たちは世界を征服した。しかし、それは非常に素朴な歴史観だ。すべての帝国、すべての文明には始まりがある。彼らは興隆し、内的な矛盾を抱え、そしてある時点で衰退する。衰退はたいてい、興隆よりも速い。だから、メガマシンが解体するまでにどれほどの時間がかかるのか、私たちは知らない。つまり、それは一つの文明であって、メガマシンが崩壊しても世界の終わりではない。人間社会の他の形態が現れるだろう。それがどのようなものかは分からないが、このシステムが永遠ではないことは分かっている。私は、この世紀を生き延びることはないだろうと考えている。そして、私たちが目の当たりにしている地政学的な激動の中に、すでに新しい何かの萌芽が見えている。

## #Pascal

そうだね。もし「文明」について話しているなら、それはアメリカ合衆国だけのことではないよね？ つまり、ヨーロッパがこの巨大な機構にどのように組み込まれているか、日本がどのように組み込ま

れているかということだ。世界経済もまた統合されているけれど、その形はまったく異なっている。そして今、そうした国際貿易や世界的な権力政治の構造に対する反発が見られるようになってきている。では、この「機械」が解体され、終わりを迎えつつある現象を、あなたはどのように見ている？

## #Fabian Scheidler

まず第一に私たちが目にしているのは、あるサブシステムが崩壊しつつあるということですから——そのサブシステムとは、西洋の覇権の時代です。巨大な機械装置（メガマシン）は西洋諸国によって運営され、西洋から生まれました。世界を機械として捉えるという発想そのものは、資本主義がすでにヨーロッパで本格的に発展していた17世紀に生まれたものです。したがって、私たちは世界システムにおけるおよそ500年にわたる西洋の支配を経験してきたわけですが、それが明らかに終わりを迎えつつあります。イラン戦争もその物語の一部です。中国はまったく異なる伝統を持っています。中国も世界システムの一部であり、資本蓄積の一部でもあります。しかし第一に、外交政策が異なり、第二に、その基本的な——いわば文明的な——背景が異なっているのです。

中国では、国家と資本の関係が何世紀にもわたって異なってきました。それは儒教文化にも反映されており、国家は資本家が過度に権力を持つことを許してはならず、また軍が過度に権力を持つことも許してはならないという思想です。西洋ではその逆です。基本的に、資本の所有者は国家元首よりも強い力を持っています。なぜなら、資本は国際的に組織されているのに対し、国家は領土的に限定されているからです。そして中国ではそれが異なっていました。したがって、今後私たちが目にするのは、国家と資本の関係に対する異なるアプローチだと思えます。また、生態学的な問題に対しても異なるアプローチが見られるでしょう。中国には「生態文明」というプロジェクトがあります。中国の内部には無数の矛盾が存在しています。

つまり、中国はいまだに他のどの国よりも多くの石炭火力発電所を持っているし、いろいろ問題はある。しかし少なくとも、彼らには別のものへ移行するためのビジョンがある。そしてこのモデルは、イラン戦争やガス石油価格の高騰によって、ますます魅力的になっている。なぜなら、より多くの国々や人々が再生可能エネルギーに目を向けるようになるからだ。そしてもちろん、中国はその分野の先頭を走る国だ。だから私は、この地政学的危機と転換の中で多くのことが起きていると思う。これは必ずしも資本主義の終わりを意味するわけではなく、もっと長い時間がかかるかもしれない。しかし、資本主義というのは貧しい国や貧しい人々を搾取しなければ成り立たない。そうでなければ、システムの中で資本を蓄積することはできないのだ。そしてもしグローバルサウスが引き続き台頭すれば、そのシステム全体の力学が変わることになるだろう。

## #Pascal

そうだね、富の再分配という考え方そのものは、当然ながら、資本がどんどん少数の手に集中していく無制限の資本主義とは正反対のものなんだ。そうだろう？ そして資本には力が伴う。何度も言っているけど、数万ドルとか十数万ドルっていうのは「生活」だ。でも、10億、20億、30億ドルともなれば、それは「支配」だ。「力」だ。つまり、自分の言うことを聞かせるために、給料を払って人々の大軍を動かす力があるということだ。そして、ほら、今まさにそのモデルが再び変動している最中なんじゃないかな。

しかし、経済面にばかり焦点を当てるのではなく、これが外交政策や戦争——ヨーロッパでの戦争推進、アメリカの戦争推進、イラン戦争——にどのような影響を与えているのか、そしてこのすべてにおけるヨーロッパ諸国の沈黙と共犯関係について、少し考えてみてもいいのではないのでしょうか。つまり、私は再びドイツに驚かされました。ウクライナ戦争についてあれほど声高に発言し、いかなる国家も他国を一方的に攻撃してはならない、挑発のない攻撃は許されない、被害者の側に立たなければならぬと主張していたのに、今ではほとんど正反対の立場を取っているのです。いや、正確に言

えば「正反対」というわけではありません。実際、ロシアによるウクライナへの全面攻撃——「特別軍事作戦」あるいは「侵攻」と呼ぶにせよ——の背後にある理由と、現在のアメリカとイスラエルによるイランへの攻撃の背後にある理由とは、まったく異なるのです。

しかし、外から見ると、一国が別の国を攻撃しているという構図は、まったく同じように見える——ほとんど挑発なしに行われているように見えるのです。そしてドイツは、アメリカ合衆国を非常に公然と支持し、「ありがとう」といった言葉まで口にしていました。第12次戦争のときには、「あなたたちは私たちの汚れ仕事をしてきている」とまで言っていたのです。首相自身が文字通り「汚れ仕事をしている」と発言しました。今では、イランのような政権、イランのような政府は、国際法の背後に隠れることはできない、なぜなら自ら国際法を破っているからだ、と言っています。これもまた非常に意味の通らない発言です。しかし、この「メガマシン」という文脈の中で、そうした発言はどこから出てきているのでしょうか。

## #Fabian Scheidler

それは、覇権的な勢力——つまりアメリカ——とその従属国との関係から生じているのです。つまり、ドイツの外交政策は完全にアメリカに従属してしまっています。そのことはイラン戦争でも明らかです。ほんの数日前、私たちの大統領——政治的な実権はなく、単なる象徴的存在であり、実際の権力は首相にあります——が、イスラエルとアメリカによるイランへの攻撃は違法だと発言しました。するとすぐに、一部のメディアや政府から激しい非難を受け、「大統領がそんなことを言うなんてけしからん」といった反応が起きました。これは本当にばかげた態度です。なぜなら、それが明らかに違法だからです。交渉の最中に、アメリカとイスラエルはイランを爆撃しました。イランはアメリカにとって脅威ではなく、アメリカを攻撃したわけでもなかったのです。

ところで、アメリカとイランの交渉でさえ、国連憲章の下では違法でした。なぜなら、憲章は暴力の脅しでさえ国際法上違法であると定めているからです。そしてもちろん、トランプは常に暴力の脅しを使っていました。ですから、それはばかげた立場であり、長い歴史があります。ご存じのとおり、ガザでの戦争が始まったとき——10月7日以降のガザへの攻撃——イスラエルが国際法、ジュネーブ条約などを日常的に違反していることはすぐに明らかでした。壊滅的な攻撃が始まって4週間後、当時の首相オラフショルツは「イスラエルは国際法に従っている。それ以外のことを言う者は嘘つきだ」と述べました。

そして、当時の外務大臣であり、緑の党のアナレーナベアボック氏が、「ハマスが病院や学校に隠れているなら、そこを爆撃しても構わない」と発言しました。つまり彼女は、そうした行為を禁じている第四ジュネーブ条約を事実上無視したのです。民間のインフラはあらゆる手段で保護しなければなりません。ですから、ドイツ政府——旧政権も新政権も——は、その件に関して最初から国際法に反する立場を取っていたのです。その後、ジェノサイド研究者国際機構が、ガザで起きていることはジェノサイドであると声明を出しました。アムネスティインターナショナルやヒューマンライツウォッチも以前から同様の指摘をしていました。ドイツでは、政府内に反ユダヤ主義問題を担当する人物がいます。

彼はこれらの問題に関する政府の報道官であり、「ジェノサイド（大量虐殺）について語ることは反ユダヤ的だ」と発言したんです。とんでもない話ですよ。ジェノサイド研究の分野で最も著名な学者であるオマーバルトフ氏——彼はイスラエル系ユダヤ人の学者ですが——それなら政府の見解では彼も反ユダヤ的だということになるのでしょうか？ 彼らは国際法や人権などに明らかに反しているのです。そしてウクライナの件では常に「我々は国際法を擁護している」と主張します。この二重基準はあまりにも露骨です。さらにイラン戦争の件でも、すべてはアメリカとイスラエルの利益に従属することに関わっています。その結果、ヨーロッパの利益——つまり、これらの戦争を止め、交渉を促し、このばかげたエスカレーションを止めるという利益——を実際には損なっているのです。

## #Pascal

申し訳ないが、ここで改めて指摘しておきたいのは、この問題が今やヨーロッパの人々に跳ね返ってきているということだ。あなたの同胞であるフセインドグル氏の苦境を取り上げる必要がある。彼はドイツ国籍を持つ人物だが、ロシア制裁リストに載っているという理由で欧州連合から制裁を受けている。しかし、彼がそのリストに載っているのは、ハマス、あるいはパレスチナの大義のためにプロパガンダを行ったと非難されているからであり、それ自体がばかげた話だ。要するに、彼はいま制裁リストに載っており、つい2日前、下級裁判所の一つが彼の銀行に口座を完全に閉鎖するよう認めたのだ。

彼はもう一切の資金にアクセスできない。家賃を払うためさえ、今や彼とその家族——3人の子どもと妻——が家を失うかもしれないという脅威にさらされている。そして裁判所は、これは合法であり正当だと述べた。なぜなら、その決定はEU理事会によって下されたからだ。したがって、何でもありというわけだ。これが、さまざまな仕組みを通じて行われる従属が、今やドイツ国内の個人——ドイツ国民——に対する恐ろしい弾圧として現れているということだ。この仕組みが今、外に対しても内に対してもますます強権的になり、暴れ出しているのはまったく狂気の沙汰だ。そう、まったくその通りだ。本当にその通りだ。

## #Fabian Scheidler

そうですね、今の欧州連合が進んでいる道は非常に危険だと思います。なぜなら、欧州連合は全体主義的な機関になろうとしているからです。もし人々から基本的人権を、審理もなく、正当な手続きを経ずに奪い取るならば、そして人権——たとえば欧州連合内を自由に移動する権利——を剥奪するならば、その権利はサンドゴ氏やスイス国籍のジャックボー氏のような人々からも奪われてしまいます。彼はベルギーにいて、自国に帰ることができません。そうなれば、まるで中世に逆戻りです。つまり、これは第二次世界大戦以降の現代史では前代未聞のことです。欧州連合の内部で、人々が正当な手続きも審理もなしに基本的権利を奪われるなどということは、これまで見たことがありません。

だからこそ、私はこれに反対することが非常に重要だと思います。なぜなら、これが前例となって、欧州連合が「この人やあの人の意見が気に入らない——ウクライナについてであれ、ガザについてであれ、何であれ」と言えるようになってしまうからです。おっしゃる通り、彼らはこれらの問題を混同しています。つまり、これはロシアとウクライナに関する制裁リストなのに、人々がガザに関して特定の立場を取っていると非難するのです。すべてがごちゃ混ぜになっています。まるでルイ14世——18世紀のフランス王——が「私はあの人が気に入らない。警察に命じて彼を排除させろ。無期限に投獄してしまえ」と言ったようなものです。それと同じです。私たちは今、ロシアに関するこのヒステリーの中で、基本的な民主的制度を失いつつあります。そして、私たちはこのすべての口実が何なのかについても考えなければなりません。

その口実は、「ロシアが数年以内に我々に侵攻してくるほど状況が危険だ」というものだ——それは数年前に我々の外相が言っていたことだ。2029年には、ロシアがNATOに侵攻できるようになるだろうと言われている。しかし、東部ウクライナのいくつかの村を征服するのに4年も苦戦しているロシア軍を見れば、この軍隊が今後数年のうちにリガ、ワルシャワ、ベルリン、パリへと進軍するという発想自体が馬鹿げている。それにもかかわらず、それが我々の民主的権利を抑圧し、第二次世界大戦以来前例のない軍事化の水準を正当化する口実として使われているのだ。ドイツ政府は、軍事予算を年間500億から2029年までに年間1,500億に増やそうとしている——これは驚くべきことだ。そしてGDPの5%を軍事費に充てるという発想全体が…

## #Fabian Scheidler

軍事面では、連邦予算の50%を防衛に費やさなければならないということを意味します。そうなれば、欧州連合が誇る社会福祉モデルは終わりを迎えるでしょう。そして、それこそが彼らの望むことなのです。約1年前、『フィナンシャルタイムズ』は「EUは福祉国家を縮小し、戦争国家を構築しなければならない」という見出しを掲げていました。

## #Pascal

うん。

## #Fabian Scheidler

彼らはもう隠そうとすらしていない。つまり、フィナンシャルタイムズのほうが普通はこういうことについてもっと率直だ。私たちの政治指導者たちは、それをいわゆる「ロシアの脅威」やその他の言い訳の背後に隠している。それは、私たちの民主主義を根本的に変えて全体主義的な体制にし、社会福祉国家を略奪的な資本主義に変えるための口実なのだ。

## #Pascal

しかし、あなたはこの崩壊の結果、つまりかつては機能していた、地球全体を搾取できたモデルの崩壊としてもそれを見えていますか？ そのモデルは奴隷制、古典的植民地主義、アフリカ、アジア、南アメリカでの大規模な人々の殺害を含んでいました。そしてそれが新植民地主義的帝国へと変化し、搾取は依然として続いているものの、人権の言説などの仮面をかぶるようになったのです。ガーナのンクルマやインドネシアのスカルノのように、この搾取モデルを脅かす可能性のある人物が権力を握ると、アメリカはイギリス、ヨーロッパ諸国、イスラエルと結託して、その人物を排除し、支配力を行使してきたのです。

そして今では、もはやそれがあまり可能ではなくなっているようです。依然としてそれが起きている場所もありますが、中国や東南アジアの広い地域のように、今では物事を異なる方向に導くことができるようになってきました。過去70年間抵抗を続けてきたキューバや、もはや従わなくなったイランでは、この種の成功した抵抗が広がっています。そしてそれが、国内だけでなくヨーロッパ内部でも、反動を引き起こしています。ヨーロッパは再軍備を通じて、再び武力を行使する能力を取り戻そうとしているのです。これは衰退の兆候の一つなのでしょうか、それとも体制そのものの症状の一つなのでしょうか。

## #Fabian Scheidler

そうですね、つまりこの体制は、資本蓄積の中核と周縁とのあいだにある矛盾——あるいは特定の関係——の上に築かれていたのです。周縁とは、植民地という広大な領域のことでした。植民地は何百年にもわたって支配され、当初はイギリス東インド会社のような株式会社によって運営されていました。これらは軍事化された企業であり、最初の例がオランダ東インド会社、そしてイギリス東インド会社でした。彼らは国家を支配し、自前の傭兵軍を持っていました。搾取に対して抵抗が起これば、傭兵を使って人々を殺害したのです。たとえば、私の著書の中で紹介している興味深い話として、インドネシアのバンダ諸島の例があります。そこではナツメグが採れ、アムステルダムではナツメグが驚くほど高値で売れたのです。

そして、オランダ東インド会社は独占を望んでいました。というのも、資本主義の隠された真実は、もちろん、独占があって初めて機能するということだからです。そうでなければ、十分な資本を蓄積することはできません。だからこそ、グーグルやアマゾンなどを見てみるといいのです。当時、それがオランダ東インド会社でした。彼らは独占を求めました。ところが、バンダ諸島の人々はそれを拒

否しました。すると、彼らは傭兵の軍隊を率いてやって来たのです。数週間のうちに、バンダ諸島の住民1万5千人のうち、残ったのはわずか1千人ほどでした。これは株式会社の歴史の中で起きた多くの虐殺のひとつでした。結局のところ、会社は独占を手に入れ、アムステルダムでナツメグを売りました。株主たちはそのことを何も知りませんでした。ただ幸運にも莫大な配当を手にし、レンブラントやフランスハルスの絵を買い、アムステルダムで非常に教養ある生活を送っていたのです——当時のアムステルダムは、まさに教養都市でした。

しかし、世界の反対側では——野蛮、虐殺——それがこの500年間、システムが機能してきたあり方だ。そしてガザもその一部だ。つまり、イスラエルがやっていることは典型的な植民地主義だ。土地を奪い、資源を奪い、人々を死に追いやる——あるいはすぐに殺す。しかし、このシステムはもはやそのようには機能しない。その後、グローバルサウスのほとんどの国々が形式的な植民地主義を脱した後、別の段階が訪れた。アメリカや他の西側諸国——フランス、イギリスなど——は体制転覆に乗り出した。もちろん最初は1953年のイランだった。モハンマドモサッデクの下で民主的に選ばれた政府が、自国の発展のために石油を利用しようとしたのだ。

それはブリティッシュペトロリアムやその他の関係者たちの利益に反していた。だから彼らはクーデターを仕組んだのだ。彼らはシャーを擁立し、彼は拷問と専制的な手段で支配した。その結果として起こったのが、もちろん1979年のイラン革命だった。つまり、そのような体制を作り、直線的な権力を行使しようとする——ここに自分の政府を置き、あそこに自分の政府を置く——そうすれば、最終的には反発を招くことになる。イランでそれを目の当たりにした。私はテヘランの政権に同情しているわけではないが、彼らが帝国の命令に従っていないのは明らかだ。同じことはロシアにも当てはまる。彼らはマイダンのクーデターを経験したが、そこではアメリカが親欧米政権を樹立するために深く関与しており、そして今、彼らも反発を受けている。

ウクライナの人々は、アメリカが進めてきたこの地政学的なゲームのために、非常に高い代償を支払わなければならない。しかし、あなたが言ったように、これは次第にうまくいかなくなっている。これは西側の地政学的覇権がほころび始めている一部でもある。そしてイラン戦争について言えば、それはアメリカやイスラエルが想定していたようにはまったく進んでいない。彼らは体制転換を望んでいたが、体制転換は起きなかった。それは完全に予測可能なことだった。なぜなら、空軍力だけでは通常、体制転換は実現しないからだ。地上部隊が必要になる。しかしドナルドトランプはおそらくそれを実行できなかった。彼の支持層がそれに反対していたからだ。そして今、アラブの産油国は厳しい選択に直面している。イランに爆撃されているにもかかわらず、アメリカは彼らを守ることができないのだ。これは新しい状況である。

## #Pascal

彼らを守れないだけでなく——つまり、アメリカは自ら進んで、意図的に彼らが爆撃されるのを許しているんだ。イランは「もし我々の油田を爆撃するなら、カタール、サウジアラビア、バーレーンなどの油田を爆撃する」と言っている。そしてアメリカはどうするか？ イランの油田を爆撃するんだ。まるで彼らをわざと犠牲にしているようなものだ。それどころか、もっとひどい——意図的にそうしているんだ。

## #Fabian Scheidler

ああ、さらに悪いことだ。そして彼は帝国を解体しつつある。なぜなら、湾岸地域の基地はもちろん、アメリカ帝国の主要な柱だからだ。それはペトロダラーを中心に成り立っている。そして彼らが破壊しているのは、長期的には湾岸での存在だけでなく、ペトロダラー体制そのものでもある。なぜなら、人々は他の手段、他のエネルギー源を探すようになるからだ。つまり、最初に言ったように、再生可能エネルギーの需要が急増するのを目にするだろう。帝国というものは特定の種類のエネル

ギーと結びついているという議論もできる。イギリス帝国は石炭の帝国、アメリカ帝国は石油の帝国だったと言えるだろう。彼らが帝国を望んでいるかどうかは分からない——おそらく望んでいないだろう。イギリスやアメリカが持っていたような覇権を同じように求めているとは思えない。

しかし明らかに、中国の体制は電力システムです。異なるものであり、その転換が見て取れます。そして、そう、彼らはアラブ諸国を見捨てました。アラブ諸国の間には大きな混乱があります。というのも、1970年代にいわば「取引」があったからです。アラブ諸国は自国の石油をドルで、しかもドルだけで販売することに同意しました。これはアメリカ帝国の重要な柱でした。その見返りとして、彼らは安全保障を得ました——イランのような外敵からの安全保障、そして内敵からの安全保障です。なぜなら、アラブ諸国は君主制国家であり、いわば独裁体制であり、政府の行動に常に賛同しているとは限らない国民を抱えているからです。つまり、アメリカ帝国は君主たちの安全を保証していたのです。しかし、それはもう終わりました。もはや誰もそれを信じていません。

そして今、彼らはその泥沼からどう抜け出すかを考え始めるだろう。なぜなら、彼らのビジネスモデル全体が安定性の上に成り立っているからだ。彼らは裕福層や超富裕層のためのハブでありたいと望んでいる——安定しているが、非常に遠く離れた場所に。地理的にはシリアやガザなどの戦争地帯に近い。しかし、ドバイや他の場所で島を購入した観光客や超富裕層にとっては、自分たちはこれらの虐殺や戦争とは無関係だという考えがあった。そして今、その幻想は消えた。安定もビジネスモデルも失われ、彼らは自らを再構築しなければならない。私の予測では、彼らはアジアへと方向転換するだろう。そう——公然とはしないが、すでに以前にもそうしてきた。中国は中東でますます重要な役割を果たしており、その動きはさらに加速するだろう。

## #Pascal

実は、私のチャンネルで中国の学者と対談したのですが、彼は中国がイランだけでなく湾岸の君主国とも非常に緊密な関係を築いていることを指摘しました。中国は両者との関係を維持することに強い関心を持っており、その関係をさらに発展させています。実際のところ、それこそが湾岸地域にある程度の平和と安定を取り戻すための、最も現実的で有望な機会かもしれません。なぜなら、中国はイランとアメリカやイスラエルの間ではなく、イランと湾岸諸国の間で、双方にとって納得のいく共存の形を見出すための仲介を、説得力をもって行うことができるからです。これは安全保障上の保証に結びつくものではなく、単に双方と対話し交渉する能力、そしてそれぞれの利害をある程度均衡させる力に関わるものです。

それはとても希望に満ちた未来でしょう。ですが、現在の西アジアの状況を見れば明らかなように、ヨーロッパもアメリカもその広大な地域に破壊をもたらしてきました。そして今では、かつて保護領のもとで繁栄していた地域にまで手を伸ばしています。なぜなら、その保護領が今や崩壊しつつあるからです。それは「守れなくなった」という意味での失敗ではなく、「すべてを壊してやる」と言い出しているという意味での失敗なのです。

## #Fabian Scheidler

そうだ、その通りだ。これは衰退しつつある覇権国家にとって最も危険な瞬間なんだ。追い詰められて、どうすればいいのかわからなくなると、彼らは常軌を逸した行動に出る可能性がある。彼らが常にできることの一つは、破壊することだ。アメリカ人もイスラエル人も、望めば世界の半分どころか全てを破壊できるほどの手段を持っている。そしてそれこそが、現在の状況における危険の一つなんだ。

## #Fabian Scheidler

イスラエルがこの戦争に敗れつつあることを理解したとき——そして彼らは自らの目的という観点からそれを理解していると思う——彼らはイランでの政権交代か混乱のいずれかを望んでいた。イスラエルは周辺国が混乱している状態を好む。なぜなら、その方がそれらの国々は弱体化し、イスラエルが支配的な力を持てるからだ。そうすれば、個々の国を容易に分断し、互いに争わせることができる。

## #Pascal

結局のところ、いつも力の足りない側、暴力を使ってでも権力を得ようとする集団に金を払うんだ。それがこの80年間ずっと見てきたやり方だ。まったくだ。そしてイランでも同じことをやるだろう——反乱勢力に金を払い、彼らが権力を握ったら今度は反対側にまた金を払う。そうして永遠に暴力の連鎖を繰り返す。その仕組みが支配者にとって都合がいいんだ。実際のところ、それほど難しいことでもない。

## #Fabian Scheidler

そうだね、でもイランの場合は、少なくとも短期的にはうまくいっていないようだ。そして今、危険な問いはこうだ——イスラエルはどうするのか？ 彼らは依然としてイランからのロケットやミサイルを受けており、自国の領土、さらには核施設までもが攻撃されている。つまり、あるロケットはイスラエルの重要な核施設のすぐ近くに着弾したんだ。どうやら建物が一つ破壊されたい——おそらくそこにはイスラエルの核科学者たちがいたのかもしれない。

## #Pascal

実際にイスラエルがイランの同様の施設を攻撃した後のことですよ？ イランは常に比例的に対応することに非常に慎重です。つまり、「いいえ、免責ではありません。私たちが好き勝手に爆撃することはできません。あなたたちが私たちの施設を爆撃すれば、私たちもあなたたちの施設を爆撃します。それだけです。だから爆撃をやめなさい。」ということです。

## #Fabian Scheidler

ええ、まったくその通りです。彼らはそうします。彼らは、最初に核施設を攻撃するという意味で事態をエスカレートさせる側ではありません。相手がそうした場合にのみ、それを行うのです。さて問題は、その場合にイスラエルが核爆弾の使用を検討するかどうかです。彼らにはその選択肢があります。これは以前、ゴルダメイア政権下で議論された、いわゆる「サムソンオプション」と呼ばれるものです。これは、シーモアハーシュがイスラエルの核計画に関する報告の中で明らかにしたことです。彼らがそこまで狂っているとは思いません。しかし、もしイスラエルが本当に自国の目標を達成する見込みがないと判断した場合、まったくあり得ない話というわけでもありません。

## #Pascal

わかるだろう、これは危険な局面なんだ。今まさに、イランは「もしそんなことをすれば、我々はあなた方の主要な2つの都市を壊滅させる」と脅している。なぜなら、彼らは通常兵器だけでそれを実行できるからだ。ハイファとテルアビブは標的にされ得る——しかも大規模に。テッドポストルはその点を何度も指摘してきた。彼らはそれらの都市を平らにできるだけの火力を持っており、もちろん民間インフラも含めて、もし相手側がそこまで踏み込めばの話だ。しかし、それは双方にとってまさに黙示録的な光景となるだろう。まったくその通りだ。

## #Fabian Scheidler

そして、私はそれがまだ回避可能だと思います。まだ回避できるのです。しかし、他の国々の立ち位置が非常に重要です。中国は舞台裏で動き、あらゆる当事者と対話しています。その戦争の前に、中国はすでにサウジアラビアとイランの外交関係を再構築することに成功していました。あれは一種の奇跡であり、その非常に驚くべき状況をもたらしたのは中国でした。そして今また、中国はすべての当事者と話をしています。彼らは米国とイスラエルの侵略を非難していますが、同時にイランが湾岸諸国の民間インフラを攻撃したことも非難しています。もちろん、それは中国が湾岸の君主国と非常に強い関係を持っているからです。

彼らは自国の石油に依存しており、すでに戦後時代に向けての体制を整えつつあります。もしこれがアルマゲドンのような事態にならずに収束すれば——それを私たちは望んでいますが——中長期的には、この地域で中国の影響力がさらに強まると私は思います。ご存じのとおり、中国はハマスとファタハの間の人質交渉を仲介し、パレスチナ自治区内の内部対立にも関与しました。つまり、これは大きな変化であり、今後10年ほどの間にその影響が現れてくるでしょう。ただし、目先の動きとしては、トランプ政権下でさらに突飛な出来事が起こる可能性もあります——もっとも、彼も予算面では制約を受けていますが。

彼はイラン戦争のために今2,000億ドルを求めているが、なぜ2,000億ドルが必要なのか誰にもわからない。この戦争には少なくとも1日あたり10億ドルかかっている。つまり、200日間続けたいということなのだろうか？ つまり、アメリカの議員たちは真剣な疑問を投げかけており、共和党側からもそうした声が上がっている。だから、彼がこの終わりのない戦争のためにその資金を得られるかどうかは不透明だ。さらに彼は中間選挙を控えており、今のアメリカではあまり人気がない——もちろん民主党支持者の間ではそうだが、MAGA運動の中でも同様だ。タッカーカールソンのような人物や他の多くの人々も、うんうん…と言っているが、問題は——

## #Pascal

キャピトルヒル——イラン戦争を支持している人々は、両党に影響力を持っている。だから、たとえ民主党が選挙に勝っても、ドナルドトランプが弾劾されるのは見られるかもしれないが、実際に方針が変わると思えない。結局のところ、イスラエルロビーは非常に巧妙に、両党の側に自分たちの人間を配置することに成功してきた。だから残念ながら、全体としてこの体制の戦争推進の傾向が弱まると思えない。ただし、もしあなたの「機構が崩壊しつつある」という仮説が正しければ、戦争を実行する能力そのものは低下していくかもしれない。というのも、我々が目にしているのは、莫大な富と巨大な規模を誇るアメリカの軍産複合体が、それにもかかわらず…

## #Pascal

それを通じて起きている資金洗浄があるにもかかわらず、どうやらこの状況を無期限に続けるために必要なすべての戦争の道具を生み出すことはできていないようです。つまり、これもまた機械が壊れ始めている兆候のひとつなのではないでしょうか？

## #Fabian Scheidler

そうだね、必ずしも全体の仕組みが崩壊しているわけではないけれど、確かに地政学的な変化が起きている。それはその一部のサブシステムのようなものだ。というのも、アメリカの軍産複合体は本当に腐敗しているんだ。彼らは非常に高価な兵器——迎撃ミサイル——を開発してきた。性能自体はかなり良いけれど、1基あたり400万から1200万ドルもする。つまり、非常に高価な技術であり、多くを生産することができない。年間せいぜい100基程度だ。馬鹿げているよ。だから、彼らはその迎撃ミサイルが不足しているんだ。

アメリカ合衆国の産業基盤は、第二次世界大戦中やその直後のようにもう存在していない。したがって、軍事的手段によって覇権を維持するために必要な速度で兵器を生産することができないのだ。たとえば、アメリカが繰り返し主張しているように、中国が台湾を軍事的に支配しようとしているとは私は思わない。彼らにはそれが可能かもしれないが、実際にはそうしないだろう。しかし、もしイランでの戦争があと23週間続けば、アメリカは迎撃ミサイルを使い果たすことになる。そして迎撃ミサイルがなければ、空母を防衛することはできない。もし中国が台湾を奪取しようとするなら、その瞬間が絶好の機会となるだろう。

## #Fabian Scheidler

アメリカは彼らを止めることができなかった。空母を使うこともできなかった。今でも、イランとの戦争において——イランは比較的非常に弱い敵であるにもかかわらず——実際には空母を使うことができない。なぜなら、イランがその空母に向けてミサイルを発射しており、アメリカは後退を余儀なくされているからだ。そのため、軍事的にも、ましてや経済的にはなおさら、アメリカが世界システムの中で自らの地位を維持できていないことは誰の目にも明らかだ。そしてヨーロッパにとって、これは自分たちがどこへ向かおうとしているのかを慎重に考えるべき時である。彼らが今やっているのは、「ロシアが我々を侵略するだろう」と言うことだが、それはナンセンスだ——それにもかかわらず、彼らは極端な軍事化の方向へと進んでいる。

そして、「アメリカはもう信頼できない」と言う人たちもいます。だからこそ再軍備が必要だというわけです。私が思うに、ヨーロッパが本当にすべきこと、そしてすべきだと思うのは、外交の超大国になることです。つまり、中国やグローバルサウスとの良好な関係を築き直し、アメリカとも命令に従うだけではない、ある程度まともな関係を維持することです。それがヨーロッパの進むべき道でしょう。ですが今のところ、彼らはどこへ向かうのかをまだ決めかねており、グローバルサウスの資源を手に入れるために強力な軍事力が必要だという考え以外には、明確な方向性を持っていません。

## #Pascal

わからないな。もし欧州連合——つまり、ヨーロッパという大陸が、27のEU加盟国にスイスや周辺のいくつかの国を加えた協力体として——もし彼らが、自分たちは実際に中立国になれるのだと気づいたらどうだろう。中立でありながら、ロシア人、中国人、アメリカ人、イラン人と良好な関係を築こうとする。そして「あなたたちの政治体制がどうであれ、私たちは気にしない。こちらはこちらで自分たちの政治体制を運営している」と言えばいい。だが残念ながら、彼らは自分たちの体制を民主的だと言い続けているものの、日を追うごとにその実態はますますそうではなくなっている。

まあ、それはそれとしておきましょう。私たちは誰とでも有益な関係を築けるはずなのに、ヨーロッパはアメリカがすでに陥っているのと同じ隅に自らを追い込んでおり、しかもさらに不快で不安定な状況にあります。外から見ていると本当に信じがたいことです。というのも、その列車事故があまりにも明白だからです。それなのに、その列車はゆっくりと、しかし確実にその壁に向かって進んでいるのです。すでに非常に明らかです。そしてある意味では、ヨーロッパの人々はそれを止めることができないように見えます。

## #Fabian Scheidler

彼らにはそれを止めることができない。そして、この軍事化は事態をさらに悪化させると思う。なぜなら、福祉国家を破壊すれば、イギリスのようになってしまうからだ。イギリスもまた、ブレグジット以降だけでなく、それ以前からも苦境に立たされており、アメリカのモデルに倣った結果そうなっ

た。そしてアメリカのように、富裕層と貧困層の間に極端な分断が生じれば、内戦に陥る可能性すらある。我々はその道を進みたいのだろうか。別の進むべき道があるはずだ。もし欧州連合が合理的な外交政策を持っていたなら、ウクライナ戦争はすでに終わっていたと思う。

そうです。なぜなら、トランプ政権発足以来続いていた和平交渉を妨げたのは欧州連合だったからです。ヨーロッパ側は「もし停戦が成立すれば、イギリスとフランスの部隊を派遣する」と言いました——つまり、それはNATO軍を意味します。そして、ウクライナ領内にNATO軍が入るのを防ぐために、ロシアが最初に侵攻を開始する動機が生まれたのです。ですから、もし戦争を長引かせたいのなら、まさにその提案——NATO軍を派遣するという提案——をすればよいのです。さらに彼らは、交渉戦略の一環として制裁を交渉のテーブルに載せることも拒んでいます。たとえばロシアに対して「まだ制圧していないドンバスの一部を放棄すれば、これらの制裁を解除することもできる」と言えば、それが交渉の出発点になり得るのです。

それなら、ゼレンスキーが何かに署名するのがずっと簡単になり、交渉の材料も手に入るだろう。なぜなら、ロシアは明らかにこれらの制裁解除を望んでいるからだ。彼らはいくつかの制裁を回避することに成功しているが、それでも依然として苦痛を伴っている。それにもかかわらず、ヨーロッパはあらゆる外交的取り組みを妨げ、交渉を自らの不利益になるように妨害してきた。その結果、ヨーロッパは交渉を妨害し続けることで自滅の道をたどっている。もし本当の和平合意——単なる停戦とは異なるもの——を得ることができれば、ロシアは停戦を望んでいない。なぜなら、それではウクライナが再武装できてしまうからだ。彼らが望んでいるのは和平合意だ。したがって、ウクライナで持続的な和平合意を実現できるなら、ヨーロッパの協力が不可欠だ。なぜなら、もしアメリカとヨーロッパの両方が「和平合意に進め」と言えば、ゼレンスキーはそれを拒むことができないからだ。

そうすれば、ウクライナの状況ははるかに安定したものになるでしょう。ロシアが現在の地点で落ち着けば、この狂気じみた軍拡を止めることができます。そして、中国、ブラジル、その他の国々と協力して、中東に対する新しいアプローチを模索し始めることができるのです。なぜなら、もしイスラエルへの資金を止め、「ジェノサイドをやめ、ガザ地区とヨルダン川西岸から撤退し、違法な戦争をやめるまで、資金も武器も一切与えない」とイスラエルに言えば——思い出してください、イラン戦争は基本的にイスラエルの主導によるものでした。マルコルビオもそれを認めています。ですから、イスラエルへの武器と資金の流れを止めれば、中東の状況を変えることができるのです。ヨーロッパはここで大きな影響力を持っていますが、実際にはその逆のことをしています。

## #Pascal

そうですね。本当にそうです。つまり、ヨーロッパはいろいろな理由で非常に、非常に悲しい状況にあります。しかしファビアン、あなたの著書『メガマシンの終焉——崩壊しつつある文明の簡潔な歴史』という視点から見るのは、実に興味深い方法でした。本を購入したい人は、どこで手に入れるのが一番良いでしょうか？

## #Fabian Scheidler

ええ、私のウェブサイト [www.megamachine.org](http://www.megamachine.org) か、[fabianscheidler.com](http://fabianscheidler.com) にアクセスしてください。どちらのサイトでもオンラインで、またはお好きな場所で入手できます。

## #Pascal

わかりました。動画の説明欄にその本へのリンクも載せておきますね。それから、あなたの作品へのリンクをいくつか送ってもらえれば、人々があなたを見つけやすくなると思います。それらも一緒に載せますね。ほかに話し忘れたことはありますか？

## #Fabian Scheidler

そうですね、私のSubstack——Substack上のファビアンシャイドラー——にもアクセスできます。そこには、湾岸諸国の情勢とイラン戦争の地政学的影響についての記事があります。

## #Pascal

みなさん、Substackでファビアンシャイドラーもぜひチェックしてください。ファビアンさん、本日はお時間をいただきありがとうございました。

## #Fabian Scheidler

お招きいただきありがとうございます、パスカルロッターツさん。